

言語なしの推論は可能か？ —ミニマリスト・アプローチからの分析—

小口 峰樹 (Mineki Oguchi)

玉川大学脳科学研究所

思考を命題的態度の内容として捉えるフレーゲ以降の伝統的な枠組みにおいては、推論を行うことができるのは、その構成要素である命題的内容（文の意義）を心的に把握することができる生物、つまりは言語をもつ人間のみであるとされる。その結果、言語をもたない動物や言語習得以前の幼児に対しては推論を行う能力が否定されることになる。しかし、動物行動学や発達心理学における諸研究は、動物や幼児が推論能力をもつと仮定しなければ説明のできない数多くの現象を報告している (Watanabe & Huber 2006; Pylyshin 2007)。すなわち、動物や幼児は、問題解決を要する新奇な場面において、生得的な解発機構や連合学習の結果では説明のできない適切なふるまいをなすことができるのである。

だが、われわれはこうした「言語を用いずに行われる推論」という事態をどのように理解すればよいのだろうか。この問題は以下の3つの問いに分解可能である。(1)言語なしの推論を構成する思考はどのようなものとして捉えられるべきか。(2)言語なしの推論は動物や幼児のもつどのような能力から説明できるか。(3)言語なしの推論はどのようなメカニズムに基づいて実現されるのか。

本発表では、これらの問いに対して、ベルムデスによる「ミニマリスト・アプローチ」(Bermúdez 2003) に基づいて検討を行う。具体的には、ベルムデスによる(2)の答えが不十分であり補完を必要とすることを指摘し、また、ミニマリスト・アプローチがどのように(3)の答えへと適用できるかを考察する。

ミニマリスト・アプローチによれば、動物や幼児における思考は「命題的思考」ではなく「技能的思考」として捉えられるべきであり、言語なしの推論もそうした技能的思考の発露として理解することができる。また、行動上の証拠から帰属可能な「原 - 否定」や「原 - 因果」という概念を導入することで、言語をもたない動物や幼児に対しても十分に推論能力を認めることができる。本発表では、これらの道具立ては言語なしの推論の説明にとって不十分であり、さらに「連合カテゴリー」を形成する能力が必要とされるという指摘を行う。続いて、言語なしの推論がどのような神経メカニズムによって実現されるのかを、ミニマリスト・アプローチを神経生理学におけるいくつかの実験研究 (Pan et al. 2008, 2012, 2014 など) へと接続することで検討する。こうした検討から、言語なしの推論の実現に対しては前頭前皮質と大脳基底核がそれぞれ異なる役割を果たしており、こうした役割の違いは両部位におけるカテゴリー化能力の違いに対応していることが示唆される。